江戸・東京の石碑を訪ねる

恩を受けたら石に刻め

名所旧跡に神社仏閣、公園。あらゆるところに石碑は建っている。しかし、それがいつ、誰が、なんのために建てて、誰が文字を書いたのか、知られていないことも多い。書道雑誌主幹の川浪惇史さんに、石碑の世界について話を聞いた。

季刊「書21」主幹
川浪惇史

●かわなみ・あつし　1947年東京生まれ。書道関係の書籍や雑誌の取材、執筆、編集に携わる。産経新聞神奈川版に「書のある散歩道〜かながわ〜」を連載中。著書に『江戸・東京　石碑を歩く』（心交社）。

江戸に花開いた石碑文化

——公園や神社仏閣、墓地など、町のあちこちに石碑は見られますが、いつごろから作られるようになったのでしょうか？

「石に刻んで残す」という行為がさかんに行われるようになったのは、江戸時代から明治、大正、昭和初期にかけてです。元々は、江戸開府にともない、築城や街づくりのために多くの石工が集められましたが、街づくりがひと段落した寛永の頃（一六二四〜四五）になると、室町時代から建てられてきた庚申塔や板碑が多く造立されるようになったといわれています。

庚申塔は、庚申塚とも呼ばれ、東京・豊島区に地名にも残っていますね。庚申信仰は中国の道教に由来する民間信仰ですが、全国的に多くの石碑が残っています。庚申の「申」の文字にちなんで、三猿（見ざる、言わざる、聞かざる）のモチーフが彫られたり、村の名前や庚申講員の名前を刻んだ板碑がいまも神社などに残っています。

現存する最も古い石碑は、江戸ではないんですが、京都の宇治市に残る「宇治橋断碑」です。大化の改新の翌年、六四六年に元興寺の僧道登が宇治川の急流に橋を架けたことを記念して建てられたものです。国の重要文化財に指定されています。

——江戸時代より前のものはほかにもあるんでしょうか？

石碑を彫る文化は元々、中国から朝鮮半島を経由して渡ってきたものです。おそらく石工も多く渡ってきたことでしょう。しかし、古代に渡ってきた石碑の文化は、連綿と続いてきたわけではなく、いったん下火になります。鎌倉から室町にかけては戦乱もあったでしょうが、石碑は仏教的な様式の多重塔などに代わっていき、記念碑や顕彰碑のような形は少なくなっていったのではないかと思います。

しかし、冒頭に話したような事情で江戸時代から再び増えてくる。

故人の顕彰碑の一つに「亀趺碑（きふひ）」と呼ばれる石碑があります。元は中国で身分の高い人物の墓の近くに建てられた、亀を台座にした石碑で、故人を讃える文章が刻まれているものです。この亀は、「贔屭（ひいき）」と呼ばれ、龍の九子のうち、龍になれなかった幻獣の亀です。力持ちで大地を支えているといわれています。

日本では、水戸光圀が亡父のために作ったのが最初といわれています。また、会津松平家の初代藩主で家光の異母弟にあたる保科正之の墓の近くにも大きな亀趺碑があります。猪苗代町の土津（はにつ）神社の境内にあり、正之を顕彰する碑文が四面に刻まれています。祭神である正之の墓に至る参道に造立されています。

東京も亀趺碑はいくつか残っていますが、品川の東海寺大山墓地の澤庵和尚塔もその一つ。臨済宗の開祖、澤庵和尚は「たくあん」の語源ともいわれているため、このお寺にあるお墓には、文字を刻んでいない大きな漬物石のようなものが墓石として置かれているんですよ。

春日局（三代将軍家光の乳母）の菩提寺、麟祥院（文京区）にも亀趺碑は残っています。麟祥院の縁起を刻む碑文ですが、春日局の墓への参道（じんどう）に置かれているので、事実上の神道碑（ひ）といえるかもしれません。

——神道碑とは？

墓前に建てられた、墓主の事績や徳を称える文章を刻んだ碑のことです。墓前や参道に建つ記念碑や頌徳碑（しょうとくひ）と区別して呼ばれます。

——具体的にはどういう神道碑が建てられているんでしょう。

八代将軍吉宗が飛鳥山（北区）に桜を植えさせて、現在に続く桜の名所となりました。ここに残る飛鳥山